

いことをわかるように説明する説明のしかたに困る、というもの四五%、答えを憚る(性の問題、複雑な人事関係の問題)もの二八%、他に若干、子どもの真意がつかめない場合、意表をつかれて絶句する場合、があげられている。

面白いのは、よく答えてやる、ものと、答えるための知識の不足を感じるものとは正比例しており、子どもの質問の多様性もまたこれに従っていることである。これに対して、きいていることには答えている、と記したものに、困った質問なし、とあるのは、答え方が一応で浅いために、子どもがあまりきかないのではないかと、察せられるものがあることは統計的に確度が高いとはいえないが、事実であるといえよう。資料のうち商家の子どもは比較的少いのであるが、その約半数が忙しいのであまりかまってやれない、と残念がつている一方、子どもの方では、ねほりはほりきく、というタイプが多かった。ラジオや、時計、玩具の構造をきく、というものも、多く含まれている。

と、答えても、殆ど答えなくても、子どもは大体においてよくものをきく、ということである。それが、四―五才を頂点とし、何、という名をきくことから、一とおわりわけをきく、という時代が最も盛んであり、しかも、子どもの成長にとって大切なことは、答そのものよりも、納得出来るか出来ないか、という心もちの問題である、ということである。そして、納得のさせられ方が、浅くて簡単である、と、発展度は少く、答そのものは不完全な答であったり、又は、いっそ答えがなくて、子どもが自分で納得しようと努力する余地がこのされている場合の方が、発展度は高い、ということがいえる。つまり、子どもが質問することは、子どもが自分でどうととしていける解答をたしかめよう、としている傾向が多分につよいことであり、それは、青年期に入るところにもちはじめ、本当の真理の探求の態度とは、稍ちがったものであるかもしれない。かなり主観的なのである。しかし、やはり、これらの質問にまじめに対応することが、後年の真の研究心の土台となることは言うまでもないし、おろそかに出来ないことも論をまたない。

Finger Painting に就いて (I)

— 発達面における一考察 —

大阪市立大学

小 西 勝 一 郎
並 河 信 子

職業指導、精神療法、個人診断等各方面に應用され多くの研究が發表されている。吾々は幼稚園児を中心に幼児の finger painting をこれら種々の角度から研究する事を目的とし、まず Lucille H. Blum 及 Anna Dragosily (finger painting: The developmental aspects Child development 1947, P. 88—P. 105) に準じて finger painting の発達過程を明らかにせんとした。

2、対象

大阪市立日吉小学校及びその併設幼稚園に於ける finger painting 未経験の六年生、三年生、幼稚園児各々二十九名(男十五名、女十四名)二十九名(男十五名、女十四名)二十八名(男十三名、女十五名)を対象としえらんだ。三グループの平均知能指数は六年生 105.12.51、三年生 110.14.73、幼稚園児 106.10.65、平均生活年齢は夫々 138.7.14.08月、102.4.13.54月、67.1.13.20月であった。なお三グループの平均知能に有意な差は見られなかった。

3、方法

実験条件を同一にするため、被験者を一人ずつ一定の別室に入れ、八色(白黒赤橙黄緑青紫)の finger paint を用い立、たまに自由に絵を画かしめ、実験者はその側で finger painting を観察記録した。

実験の開始に先だつて指絵が興味深い事、無害な事、手で画くこと、paint は洗えば落ちること、クレパス画との描法の相違等の説明を与えた。なお finger painting の結果と比較対照するため、

約一週間後これと同条件にて同じ内容のクレパス画をかゝせた。

4、結果とその考察

結果は次の諸点について三グループ間、男女間及び finger painting とクレパス画との差を検討した。

1、色彩に就いて

a、最初に選択した色と好色 最初に選んだ色として最も多いものは幼稚園児と六年生では共に赤であり、三年生では黒であった。三グループを暖(赤橙黄)寒(緑青)其他(白黒紫)に就いて比較すると幼稚園児は三年生より暖色が多く寒色は少いが、六年生との間には有意な差は見られない。三年生と六年生とでは、六年生に暖色が多く三年生は其他が多かった。なお女子は男子よりも暖色をえらぶ者が多く寒色が少い。

Blum などによれば低学年高学年ともに寒色が多く我々の結果と一致しない。これは彼等が緑の絵具で最初に実物教示をした関係ではないかと思われる。

なお同じ被験者を用いて finger paint と同色の八色のカードを示し、最も好む色を選ばせたと、幼稚園児は赤、三年生は緑、六年生は黄色であつた。これは最初に選んだ finger paint の色と必ずしも同一でないが、暖寒其他に就いて両者を比較すれば三年生においてのみ差があり、園児と六年生とは同傾向を来した。

b、描画中に使用した色の種類と数 Finger painting 中に使用した色彩は夫々三グループによってすべての色彩か使用せられてゐる。各色彩に就て各グループを比較すると三年生は幼稚園より白黒

黄緑青茶を使う者が多く、六年生は幼稚園児より白茶を使う者が多い。三年生は六年生よりも青を使っている者が多い。男女間では赤橙等の暖色を使用する者が男子より女子に多い。

全体的に見れば三年生が最も多くの種類の色彩を使い、ついで六年生、幼稚園の順になっており、男子より女子に多数の色を用いる者が見られる。此の傾向はクレパスに就いても多少の相違はあるが大体同様であった。なお finger painting に比して有意ではないがクレパス絵に、より多くの色が使われているようである。

Blum 等によれば学年の低い者が多くの色を使用しているが此の研究では他の傾向が見られるが明らかとは云えない。特に三年生が最初に選択した色彩の場合と同じく、他の二グループと甚しい対照を示していることは更に検討を必要とするところである。

2、最初に絵具を置いた場所

一枚の図表の表面を九等分してどの位置にまず paint が置かれるかを調べると、紙を横置の時は中央が最も多く、次いで中央左、中央上、左上等の順となり、縦置では、中央の上、左下等が比較的多かった。学年別男女別の差はみられない。Blum 等にありても横置の場合には中央に paint をおく者が多し。

3、描画の方法

描画の方法即ち運動は Blum 等に準じて pressing (おす、ならす) Rubbing (こす、こむ) Drawing (描く) Stroking (なでる) Doting (点でかく) Scratching (かき、ひ、かく) に分類した。多く使用される順にあげると六年生は Drawing Rubbing Pressing stroking Doting Scratching、三年生は Drawing Rbbing pres-

sing Doting、幼稚園児は Drawing Rubbing pressing Stroking Doting の如くで云うまでもなく三グループを通じて Drawing が一番多かった。なお Rubbing は幼稚園児より三年生六年生に多く用いられ、Doting は三年生が他のグループより多い。男女間に差はなかった。

4、手の使用の左右関係

手の左右関係は幼稚園児は他グループに比し両手を使用するものが多いと予想したのであるが、各学年を通じて右手でかく者が多く両手でかくものが少なかった。左手でかくものは左効の者以外三、六学年に見られなかったが、幼稚園児には明瞭な左効はみられないにかゝらず十四%が左指のみでかいている。

5、使用した手の部位

全体的に人差指が最も多く使われたが其の他の指も使用され種々な併用も若干みられた。学年を通じて有意な差は見られなかったが、親指片手の使用は園児にのみ見られた。方法の相違によるかも知れぬが Blum 等の如き高学年に進むにつれて全体の手の使用が減じ、指の使用がふえる現象について、有意な差は認められなかった。

6、水、手拭の使用

Finger painting に際し自由に使えるように子供の傍に置いた水は手を洗い、画面に塗るために使用する者があつたが、幼稚園児は殆んど使用していない。これを他の二グループと比較すると有意な差が見られる。三年生六年生間には差はなかった。手拭の使用には洗つた手を拭くもの、汚れたまゝの手を拭く者等があつた。園児は

殆んど使用せず他の二グループと異なる。なお三年生六年生間に差はなかった。何れにしても園児は水とか手拭とかの使用に注意がむかないと考えられる。

7、紙の置方と描画中に於ける紙の回転

最初に用紙の置方を縦においたものが全体（八六）の中で二九名、横が多くて五七名で、男女別、学年別、finger paint、クレパス別によつて大差は見られなかった。次に三年生六年生のクレパス画に就いては、描画中紙を回転する者が多かったが園児では回転する者が殆んどなかった。回転は背景海空等クレパスで一様に向うて行く時にはげしくなされるようである。園児は線画が多い為に回転が少いと思はれる。

8、内容

描画後子供の与えた画題では人物人形、乗物植物果物、動物、風景、家具、想像物其他がみられた。男女間において乗物は男子に多く植物果物は女子に多かった。なお finger painting に就いて子供の与えた画題が明瞭に理解出来るか否かを調べると幼稚園児には理解出来る者が多い。園児には題をつけぬ者、題の判らぬ者が多く、三年六年にはその如き者は殆んどなかった。併しクレパス画では殆どの者が画題がはっきりしている所からして表現の材料としては finger paint は余り向かないと考えられないこともない。園児は独言を話して絵具の感触を楽しんでいる如き者も相当見られた。

9、専門家による画の評価

最後に児童の絵を学年を無視して混合し、先ず finger paint を、次いでクレパス画を学年に応じて三グループに分けるように二人の

心理学者及び二人の芸術家に依頼した結果、三グループ間にどの程度の混同がなされるかを分析した。クレパス画と finger painting 何れに於ても園児と小学生との区別はつきやすいが、三年六年間にはより多くの混同が見られた。描画の発表に於て、園児と三、六年グループには相当差が見られるのではあるまいか。finger painting の方が学年が狂う傾向が見られ、従つて技術が拙劣になると考えられるが有意な差ではないので直ちに決定出来ない。（四人の評定者間には一名を除いて有意な相関が見られる）

10、其他

実験中に paint をガラスのつぼに入れた為、瓶で押し割った者があったがやはり破損しない物に入れる方がよいと思う。着用させた上帳は六年生には汚す者が見られず三年生特に園児に多かったのも考慮すべきだと思ふ。小学生は夫々何か描く為に努力していたが園児は画面で遊んでいる者が多く見られた。

5、結論

Finger painting の発達的面を明らかにせんとして幼児の finger painting を中心に小学三年生及び六年生のそれと比較検討し、更にクレパス絵とも対照した。その結果、finger painting の過程に於ける分析では年令の増加に伴う変化を示さない諸点も見出されたが、全体として完成された作品からすれば、幼稚園児が三、六年生グループと区別されうる相違を示しているようである。

クレパス絵と比較すると描画の材料としては finger paint よりもクレパス絵の方が複雑な表現が可能であると考えられ、finger

paint には更に描画以外の応用面が示唆されるようであった。なお我々の研究は実験対象が少く、幼稚園児は入園当初であり決して夫

々のグループを代表するとは云えないであろうが今後この仕事を拡張し追求して行きたい希望である。

Personality projection in the Drawing of the Human Figure. (CA Methode of personality Investigation)

By Karen Machover

姫路工業大学 釘 宮 冨 子

この書の著者は、New-York 市における Lings County の Br-Oliver College 精神病科研究科講師で同時に Long Island 医科大学の臨床精神病科の Instructor でもある。ここに紹介する人物画による Personality Projection Test はかつて Goodenough が人物画を描かせそれによって児童の知能を測定しようとしたそれ自体の発展と本来的には見なしてよいもので、児童の Personality を検診するための Projective Methode として利用された一つの試みであるといえよう。即ち著者は人物画を描かしてその描き方を解釈してゆくという方法で、人格分析の一つの方法と概説せんと試みてゐるもので一九四九年の初版である。

人物画を描くことにより Projection される自己表現の伝達機関としての body image に次の如き理論的根拠をあたえている。画像もしくは自己は、あらゆる行動の relevance に最も緊密なポイン

トを有しており、人間の成長過程に於いて種々なる感覚器管の感知が個人的な経験から生じた如く、描画に於いても或程度の個人の形態や容姿のものにおいて本人自体を導き出すに相異ないし、換言すれば一人の人物画を描くことは body image の或る投射を含みながら描く本人の要求、葛藤などを表現するための自然を伝達機関の役割を果すということである。この様にして画像の解釈が成巧すれば、描かれた人物の形は本人自身の歩き振りや筆跡その他各種の表現的がな運動が物語と同じ種類の親近性をもつてその個人と密接に結びついているという仮説が成立する。この書における Personality analysis の技術はそれら自己投射の主なる特長を確立しようとして試みなのである。この様な理論的根拠としての考察に其他描かれた人物画がどの様な点で明確に常変らず被験者自体の具体的な人格構造に結びついて表現されるか、どの面が意識的な自己欲制と変容性